
向日葵の君

紗妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵の君

【Zコード】

N5712A

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

ジリジリとうだるような夏の日、僕は君に逢いに行く。自転車をひいで、一陣の風となって。

背中から前へと押し抱くように聳える濃緑の山々は、さながら、油蝉達の凝縮された生を贊美し、命の滾りを思う存分謳歌させるスピード一カ一の役割を買って出たらしい。彼等の大合唱が塊となつて僕の背を押すようだ。

それにしても、暑い。

焼けるような陽射しが、真上から容赦なく大地を焦がす。

あつい！

こめかみから顎に向かい、汗が滝のように流れ落ちていく。
それでも僕は、右、左と交互に、両の太股に掛ける力を弛めない。
上半身を前のめりに倒し、腰を高く上げ、左右に躰を思い切り揺らしながら重いペダルを漕ぐ。

もう少し。

右脚に全体重を掛ける。

次いで左脚。

あと一漕ぎだ！ あそこさえ越えれば……！

躰を大きく右に傾ける。躰がゆっくり沈んでいく。
顎の先を汗が滴り落ちた。

刹那……。

パツと開けた視界。心地よい向かい風が、火照った頬を撫でる。
眼の前には小さな港街。だだつ広い畠の真ん中を突つ切るこの細い坂道は、街まで真っ直ぐ続いている。両脇を彩るのは背の高い向日葵並木。黄金色の花の匂いが充満して、苦しいくらいだ。
視線を少しだけ上げれば、奥に広がるのは真っ青に澄んだ一面の大海原。

空の蒼と海の青を分けるのは真っ白な入道雲の役目だ。それは天球を支える巨人さながらに立ち上がり、両手を一杯に広げて僕を迎えてくれるよう。彼の頭上から、ぐぐり天球を描いて僕の背後まで、

夏の濃い蒼空が広がっている。

坂道を一直線、ブレーキもそこそこに飛ぶように駆け下る。

襟元から入り込んできた風が、シャツの背中を帆のように膨らませる。慌てて鉗を外すと、裾が風にはためき、抵抗から解放された僕の躰は更にスピードを増す。

黄金の草原から、深い深い蒼に向かって飛び出していくような気分になる。

爽快！

さつきまで五月蠅いくらいに響いていた油蝉の声さえ遠退き、風の音だけが渦巻いて鼓膜を叩いている。

違う。

僕自身が風になつたんだ。
僕は風だ。

透明な風。

どこまでだつて飛べる。

だつて、ほら、大空は両手を広げ、僕を受け入れてくれるじゃな
いか！

白い壁。赤銅色の屋根。この街唯一の駅舎に到着したのは、暑さ真つ盛りの午後一時五分前。

一時間に一本きりの電車。到着時刻は午後一時丁度だ。

自転車のスタンドを倒すことさえまどろっこしく、倒れるに任せ
て、僕は舎内へと駆け込んだ。改札をすり抜け、そのままホームへ
と直行する。

二、三人の大人が、タオルで汗拭いながら電車の到着を待つて
いたが、誰も僕を責めやしない。

のんびりとした田舎街。

ホームの端では、白のワイシャツ、濃紺の制帽を目深に被つた駅

長さんが、跳ね返りの陽射しに眉を顰めながら電車の進入を促している。

もうすぐだ。

僕の心臓がドキドキと高鳴る。鳴り止まないのは、自転車を飛ばしそぎたからなんかじゃない。

8月の今日。約束の日。

この小さな駅に、僕は君を迎えてきた。
白いセーラー服、長いおさげ髪の君は、きつとこの街の風景に似合つだらう。

だって、ここは僕の故郷。僕の大好きな街だから。
にやけてしまふのを誤魔化したくて、わざと空を見上げた。天球の中央から降り注ぐ射るような陽射しは、少し強めの海風に和らげられて、今の僕には逆に心地良い。

その時……。

ガタン、ガタン。

規則的な低い音が、最初は小さく、次第に大きく耳朶を打つ。誘われるよう視線を送れば、ジリジリと照りつける太陽光に熱せられたコンクリートから湧き上がる、搖らめく大気の中、蜃氣楼のようにゆらゆらと現れた白と緑のストライプ。一両編成の電車がホームへと滑り込んできた。

耳の奥でドキドキがどんどん大きくなる。周囲に聞かれないかと心配になるほどだ。

最初に、何を言えばいい?

暑かつたかい? ……当たり前だ。

ようこそ。……なんか気取つてる。

それより、それよりも、一番大切なことは……!

少し邪な僕の考えを邪魔するように、ガタガタと大きな音を立て、三つしかないドアが開いた。

僕のドキドキは最高潮。胸が痛いくらいだ。

手を繋いでも、……いい、かな。海を背にする坂道、向日葵の花

を渡しながら、出来るだけ然り気なく。……なんて、そんなことを考へていると、暑さとは別の汗が吹き出していく。

ええい！ もう、どうとでもなれ！

僕は顔を上げ、君の姿を探した。

一番先頭のドア、独りだけ降り立つた女性。長い黒髪と白いワンピースが海風に靡く。胸に抱いた白い花束。

君だ！

ドキドキは、瞬間、どこかに消え去り、何も聞こえなくなる。頭の中は真っ白だ。あれこれ考へていた言葉なんか、何一つ出てきやしない。

嬉しさに何も考えられないままに、僕は手を振る。
君が気付いてくれるよ。つい。

僕の大好きな笑顔を、……向日葵のように眩しい笑顔を、僕に向けてくれるよ。つい。

手を振る。

大きく、大きく手を振る。

思い切り大きく、手を、振る。

手を、振つて……。

僕の横を通り過ぎていく、君。

気付かない？

なぜ……？

振り向きやま、君の背に手を伸ばす。

指を伸ばし、柔らかなワンピースの肩に、もう少しで触れそうになつて……。

けれど、僕の腕は力無く落ちていった。

……ああ、そうか。

君には僕が見えないんだ。

君のいる世界と、僕が今いる世界は、もう、違うんだ。

思い出した。

思い出して、僕は哀しくなった。

そうだ。あれは十年前。八月の今日。夏真っ盛りの晴天の日のことだった。

僕は、この駅に君を迎えてきた。迎えて来て、……けれど、君と手を繋ぐことはできなかつたんだ。

あの日、僕の時間は止まつてしまつた。

動かない、静止したままの時の中で、僕は足搔いていたんだ。繰り返し、繰り返し、八月の今日、君を迎えて来ることを繰り返し、濶んだ空間の中を行つたり来たりしていたんだ。

そして、全ては僕だけを残していつた。

立ち止まつてゐるのは僕独りだけ。

君の時間は十年間、ちゃんと流れていたんだよね。少し強い潮風が、君と僕との間を通り過ぎていく。

……そうだね。

十年前の今日、約束を守れなかつたのは僕。なのに君は、それでも君は、毎年必ず、八月の今日、この駅に降り立つてくれたんだ。白い花束を僕に手向けるために。嘘吐きの僕を、一言も責めることさえしないで。

ごめんね。

君との約束、守れなくてごめんね。

嘘吐きで、ごめんね。

十年の歳月は、きっと君にとって、とても長くて重かつただろう。

ごめんね。ごめん。

でも、それも、今日で最後。

もう君は、この駅に降り立つことはない。

君の左手の薬指に光る綺麗な指輪が全部教えてくれた。それをくれた人は、きっと素敵なひとなんだろうね。すごく綺麗になつた君。なにより、君が取り戻してくれた向日葵の笑顔。

君は幸せに向かつて歩き出していくんだね。

充分だ。

それだけで、僕はもう充分だよ。

君と並んで向日葵の道を歩くのも、きっと、これが最後。
だから、……ごめんね、ほんの少し、いつもより距離を縮めたり
して。

気付けば、吹き抜ける夏の風は、微かに涼しさを纏い始めている。
空の蒼も深さを増し、透明度をも増して、次の季節へ移ろう準備を
している。

そうだね。

時は決してとどまることなく流れ続けていくんだ。

動けなかつたのは僕だけ。前へ進めず立ち止まっていたのは、僕
ひとりだけ。

どんなに望んでも、僕の時間は、もう君には追い付けない。

そうだね。

僕はもう、行かなければいけないんだ。僕が本当に居るべき場所
へ。

幸せそうな君の笑顔が、僕の背を押してくれた。だから僕は風に
なり、空の果てまで飛んでいけるよ。

ありがとう、大好きな君。
ありがとう、向日葵の君。

夏の太陽のような君の笑顔を、僕は決して忘れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712a/>

向日葵の君

2010年10月8日16時00分発行